



◎イギリスのパブリックスクールを模範として創立。「レディー&ジェントルマン・エリート教育」を理念として、国際社会で必要な力を養う。イギリスのイートン・カレッジや、アメリカのウェリントン・スクールとの交流などの国際教育にも力を入れる。

設立
1981(昭和56)年
形態
全日制/普通科、理数科、英語科/共学
生徒数
1学年約400人
12年度入試合格実績(現浪計)
国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、東京大、一橋大、名古屋大、京都大、大阪大、九州大、国際教養大、首都大学東京などに92人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、国際基督教大、上智大、法政大、明治大、早稲田などに延べ919人が合格。
住所
〒350-1336 埼玉県狭山市柏原新田311-1
電話
04-2954-4080
Web Site
http://www.bunri-s.ed.jp/

埼玉県・私立
西武学園文理中学・高校

進路指導

生徒を個々に把握し 教師全員で生徒を支え 前向きな進路を促す

変革のステップ

背景	実践	成果
<p>◎進路選択に対して受け身で、自ら明確な目標を描ける生徒が少なかった</p> <p>STEP 1</p>	<p>◎データの活用、LHRにより自己理解や進路目標を描く力を高め、総合学習によりクラス間の交流を活発化</p> <p>STEP 2</p>	<p>◎客観的データによる指導と学び合う雰囲気醸成により、生徒が前向きに進路を選択するようになった</p> <p>STEP 3</p>

**自分を深掘りして「知る」ことで
進路を選ぶようにさせたい**

西武学園文理中学・高校は、緑豊かな埼玉県狭山市にある中高一貫の私立校だ。1学年12〜17クラスという大規模校であり、21年連続で東京大合格者が輩出する進学校でもある。

進学実績が好調な一方で課題もあった。生徒は素直で勉強熱心な反面、明確な目的意識や自己理解に基づいて進路を決定する姿勢があまり見られなかった。進路指導主任の加藤潤先生は次のように語る。

「ここ数年で、自分の進路を深く考えなかったり、受け身でいたりする生徒が増えていくと感じます。『親が理系に行けと言った』就職に有利だから』という理由で理系を選ぶ生徒が目立ちました。しかし、理系に進んだからといって必ず就職できるわけではありません。大学で研究するにしろ社会で働くにしろ、自分の価値観や適性としてしっかり向き合った上で進路を選んでほしいと考えました」

3年生の秋になって志望に迷いが生じて面談を申し込む生徒や、大学進学後に自分の適性と学部内容のギャップに悩む生徒は少なくない。進路指導室で突然泣き出し、「A大を希望していたが、親に言われたから行きたいと思いついたのかもしれない。本当は海外に留学したい」と、悩みを打ち明けた生徒もいたという。

進路指導副主任の金井達亮先生は言う。

「保護者は大学名で人生が全て決まるわけではないと分かっているけど、我が子には高い学歴を求め、それが子ども自身による進路選択に影響を与えていることも事実です。しかし、生徒がしっかりと根拠を基に目標を決めれば、保護者は応援してくれます。そうなった時こそ生徒は自ら学び始め、学力を伸ばしていくものです。生徒が自信を持って進路目標を描ける指導が必要でした」

模試データを徹底活用し 志望校への意欲をかきたてる

生徒一人ひとりの前向きな進路選択を後押し



西武学園文理中学・高校
加藤 潤 かとう・じゅん

教職歴・同校赴任歴共に17年。進路指導主任。「生徒が社会に出た時に『一緒に仕事がしたい』と思われる大人を育てたい」



西武学園文理中学・高校
竹谷好広 たけたに・よしひろ

教職歴・同校赴任歴共に13年。進路指導副主任。「基本を大切に！ 努力3倍」



西武学園文理中学・高校
金井達亮 かない・たつあき

教職歴・同校赴任歴共に10年。進路指導副主任。「生徒の力を引き出すこと。そのために自分自身が成長し続ける」

するために同校が重視しているのは、模試成績や学習記録、生活習慣アンケートなどのデータの活用である。特に、模試の結果は徹底的に分析し、生徒一人ひとりの学力の伸びや苦手分野を把握すると共に、過年度生と比較して合格の可能性を予測し、生徒の進路選択や面談に生かしている。

データ活用の最大の目的は、生徒を励まし、志望校への意欲をかきたてることにある。1・2年生の面談では、教科ごとに苦手分野を明確に伝え、弱点の克服を促して一歩でも目標に近付けるように励ます。2年生の秋以降、入試を意識し始める時期には、生徒に自信を持たせるようなデータを意識的に示す。中でも生徒の心に響くのは先輩のデータだと、進路指導副主任の竹谷好広先生は話す。

「同じ学校で、自分たちと同じように学び、生活していた先輩の実績は、生徒にとって何よりも身近に感じられるものです。『君と同じような成績で合格している先輩がいるから頑張ろう』と励ませば、志望校と学力の差が多少あっても、生徒は諦めずに前に進むことが出来ます」
このように、生徒に自分の現実の学力を直視させ、志望校に届くようにするために、自分は何をすればよいのかを具体的に考えさせることで学びに向かわせて、進路に対する意識を高めている。

志望校検討会で生徒個々を分析共有し 担任の進路指導をバックアップ

3年生12月の志望校検討会でも、データは重要な検討材料となる。

志望校検討会では、第1志望校の合格可能性を見極め、合格に向けて必要なことを明らかにすると共に、確実に合格できそうな出願候補校を選ぶことも目的としている。第1・2志望校は生徒の意見を尊重して、ある程度の差があっても挑戦させるのが同校の方針である。その一方、生徒が心おきなく第1志望校に挑戦できるよう、検討会で併願校を選び、生徒に提示するのである。

検討用資料には、生徒一人ひとりについて、模試結果だけでなく、現在取り組んでいる問題集や悩みごとなど、学力以外の材料・情報も多面的に盛り込む。そして、特に併願校は、進路指導部と3学年団が知恵を絞って、議論して決める。データの裏付けもあるので、生徒も納得の上で出願するという。

志望校検討会の2つめの目的は、担任が自信を持って生徒と向き合える意識を醸成することにある。加藤先生は次のように語る。

「5年程前まで、志望校の検討はほとんど担任に任されていました。担任1人で問題を抱え込み、ひたすらデータと向き合い、悩んでいる重苦しい空気は、生徒にも伝わります。

「夢ノート」(例)

第2回 他人から見た自分
 *親・友人・先輩後輩などにアンケートを記入してもらい、客観的に自分を見つめ直し、自分を再発見する

アンケート
 お名前 _____

これは()についてのアンケートです。自分について深く考えるために実施しています。

1. この人の強み・得意なこと/弱み・苦手なことをそれぞれ3つずつ挙げてください。

■強み・得意なこと
 1. ()
 2. ()
 3. ()

■弱み・苦手なこと
 1. ()
 2. ()
 3. ()

2. この人は、将来どのような仕事をしたいですか？また、なぜそのように思いますか？

■将来の仕事 ()
 ■その理由

記入例
 ■将来の仕事：自動車の販売業。人を幸せにする仕事 ほど 夢想的でなくていいですね。
 ■その理由：明るく元気があつた方がいい。また積極的なので、人前に話したり、先頭にたつてリードしたりする仕事がいいと思うから。

アンケートまとめシート

強み・得意	弱み・苦手
■私について(アンケートをもとに記入) 自分で思うこと(事前に記入)	
■気づかなかった意外なこと(事後に記入)	
■将来の仕事について(回収したアンケートをもとに記入) 自分がやりたいこと・気になっている仕事(事前に記入)	
■アンケートで書かれたこと(事後に記入)	

「夢ノート」の第2回は、身近な人に自分について聞き、客観的に自分を見つめる機会とする *学校資料をそのまま掲載

生徒が前に進むためには、担任が自信を持って生徒と接することが大切です。進路指導部が志望校検討会を通して担任を支援することで、担任が自信を持って生徒との面談に臨め

ば、生徒も前向きに進路選択が出来ると考えました」
 志望校検討の過程は、保護者にも伝えるため、学校に対する信頼感・安心感が以前に増して高まっているという。

「夢ノート」に人からの評価を記入してもらう

客観的な生徒把握を通じた意識付けと共に、LHRと「総合的な学習の時間」(以下、総合学習)を活用して進路意識の向上も行っている。1年生のLHRを中心とする活動は、2学期に作成する「夢ノート」だ(図)。自己分析を行い、自分の適性や将来の夢を描き、学びへのモチベーションを高めるのが狙いである。手順は以下の通りだ。

小・中学校時代の自分を振り返って、頑張ったことや影響を受けたこと、なりたかった職業などを書き込む。続いて、保護者や友だち、先輩に「他人から見た自分」というアンケートを記入してもらい、今まで気づかなかった自分を知る。その上で、将来の仕事や生活などに思いをはせ、夢や目標を具体的に描く。最

最終的には、描いた目標を基に、1年生後半で文理選択を行う。

生徒の視野を広げるために、総合学習では社会人講演会を開く。取り組みの特徴は、生徒自らが講演依頼を行うことだ。話を聞きたいと思う人に、依頼理由と講演内容を生徒が依頼状を書いて送る。日程調整や講演料の関係で断られることが多いが、それだけに実現した時の生徒の達成感はひとしおだという。

「社会経験を積ませるために、あえて生徒に任せています。ある企業の代表取締役は、普通なら高校で講演を行うような方ではありませんでしたが、高校生から依頼を受けたのは初めてだからと喜んで来てくれました。生徒もやれば出来るという達成感を感じているようです」(加藤先生)

LHRは担任が個性や持ち味を発揮する場

LHRでは学期に数回、担任の自由裁量で運営される時間が設けられている。担任が個性や特技を生かして運営するこの1コマも、生徒が視野を広げ進路意識を高める上で大きな刺激となっている。

例えば、金井先生は、受験で悩むことの多い3年生の11月に、あえて自分の仕事上の悩みを生徒に打ち明けた。その後、グループになつて

生徒同士で悩みを語り合い、悩んでいる相手に応援メッセージを書いた。

「エリート選抜東大クラス」を受け持つ竹谷先生は、模試データを使いながら話をすることが多いという。クラスの学力の現状を語り、志望実現に向けた具体的な学習内容や問題集を紹介する。そして、自分が高校時代、どのように苦手教科を克服したのかといった経験談を交えながら、努力は必ず報われることを説く。

「入試に関する情報を伝えることも大切ですが、それ以上にLHRで重視しているのはクラスの和です。クラスがばらばらであつても、いくら一人ひとりの生徒の偏差値は高くても、大学入試で良い結果を得ることは出来ません。団結して行事を成功させる、きちんと皆で掃除に取り組み、互いに分からないところを教え合う。クラスの結束が、結果的に一人ひとりの志望実現にも結び付くことを、生徒に訴えていくことが大切だと思つています」(竹谷先生)

このように、担任が独自にLHRを運営できているのは、教師全員が同じベクトルで指導できているという安心感があるからだという。

「学校や学年団が共通の目標を持ち、教師全員で生徒に示しているからこそ、それを土台として、一人ひとりの教師が自由に個性を発揮しながら指導をする余裕が生まれるのだと思います」(金井先生)

総合学習や自習室が クラス間の垣根を取り払う

総合学習は、学年の一体感を保つ上でも効果を上げている。

同校は、普通科、理数科、英語科の3つの科があり、普通科は更に附属中学校から進学する内進生と、高校入学生である高入生、エリート選抜東大クラスが別々のクラスのまま3年間を過ごす。これだけ科・コースが分かれると、学年全体で足並みをそろえるのは難しいと思われ、同校ではクラス間の交流を頻繁に行い、学年全体で統一感を保っている。その結束力を生み出す秘訣の1つが総合学習だ。

同校の総合学習は、14〜15講座から生徒が選択しテーマ学習に取り組み。所属する講座は生徒の希望が前提であるため、結果的に学級横断の編成となる。クラスも進路も異なる生徒が集まり、1つの課題に向けて取り組む中で、自ずとクラスの垣根が取り除かれていくという。

進路指導室に隣接する自習室も、クラスを超えた生徒の交流の場だ。12年度入試では、3月の卒業式が終わった後にも、自習室にさまざまなクラスの生徒が集まってきた。既に合格した生徒も来て、後期日程を受験する仲間のためにグループディスカッションの練習をしていたという。この時、自習室で最後まで頑張っていた6人の後期日程の受験者は全員合格した。クラ

スを超えて生徒同士が支え合い、勝ち取った合格だった。

「私立高の場合、とかくコースごとに壁ができ、閉鎖的になりがちです。コースの壁を取り払うことで、仲間意識が高まり、それが進路意識の向上や学びに向かう原動力にもなるのです」(加藤先生)

中高6年間を見通した 指導体制の確立が課題

今後の課題は、模試データの活用を更に多くの教師に広げていくことだ。データよりも経験に頼った指導をする教師はまだ多い。より多くの教師がデータを活用した学習指導が出来るよう、その活用方法の普及に努めていく。

もう1つの課題は、教師の足並みがよりそろうように、中高6年間を見通した指導体系を構築することだ。

「個々の教師の指導力は高いのですが、学校全体としてまとまりきれていないと感じています。教師全員で結束して取り組める体制が出来れば、本校はもっと伸びていくと思います。教師が輝いていなければ、生徒も輝きを失うでしょう。年齢やキャリアを超えて教師が団結する意識を醸成し、相乗効果を発揮できる組織づくりを進めていきたいと思えます」(加藤先生)